HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	編集後記
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	言語科学研究, 1, 109-109
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91814
Type	other
File Information	1_98-00-editor's note.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

編集後記

西洋言語学講座と言語情報学講座が合併して新たに「言語科学講座」となったのは大学院の改組により「文学研究科」が「文学院」となった平成 31 年（2019）のことであった。当初は、正直なところ、金融機関の合併同様、本来は別部門であった組織同士の協力関係がスムースに実現できるのか懸念がなくもなかったが、「言語研究」という共通の目的が教員や学生を結び付け、研究、教育両面において充実した「言語科学研究室」という新体制を構築できたのは幸いなことであった。しかし、その一方で、教員数の増加に伴い、所属する学生数も増加し、大組織となったことで、研究教育組織としての一体性をいかにして維持し、強化し、研究のレベルを上げていくのか、ということが課題として意識されるようになって来た。このような状況のなかで、有力な対処方法の一つとして、研究室としての学術雑誌の発刊も重要な懸案として、たびたび話題には上っていたが、諸般の事情でなかなか、実現には至らなかった。今回、困難な状況のなかで、なんとか実現にこぎ着けることができたのは、日本を代表するゲルマン語研究者のお一人である清水誠教授の御退職、という節目に、少しでも教授のこれまでの研究・教育に対する御尽力や御貢献に感謝し、その御業績に敬意を表したい、という講座内での了解があったからである。趣旨に御賛同して御協力いただいた教員、学生、卒業生の方々に感謝申し上げるとともに、雑誌発刊の原動力となって下さった清水教授に心から感謝申し上げたいと思う。もっとも、教授は、かろうじて御業績表の掲載をお認め下さったが、それすらも、負担をかけるから、と当初は固辞されていた。御配慮に感謝申し上げるとともに、最後まで御心配をおかけしてしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいである。私事であるが、一言、述べさせていただくと、清水教授と私は三つしか違わないが、私がまだ院生だった頃、北大に助教授として着任され、私にとってはケタ違いの「天才」として常に遠く仰ぎ見る存在であった。その一方で清水教授は、大変な碩学であるのに、第一人者に得てしてありがちな、いわゆる「ラスボス」感の全くない方でもある。人間的にも立派な方なのである。少なくとも、私は、そういう世俗性を教授に感じたことは一度もない（もっとも、私がただ鈍感なだけかもしれないが）。教授が去られるのは研究室にとっては大きな痛手ではあるが、教授の御研究の益々の御発展を心から御祈念申し上げたいと思う。

本誌は、まだまだ小さな芽でしかないが、多くの方々の御協力により、大樹に成長できるよう、今後も暖かくお見守りいただければ、と願いつつ筆を置く。

（佐藤知己　言語科学研究室主任　編集委員会代表）